

専門まちの保健室「看護師による生活習慣病と足の相談」に 参加した地域住民の健康に対する意識

看護学部

助教 じょうほうたまき ○城宝環、講師 かたおちあき 片岡千明、教授 もりきくこ 森菊子

地域ケア開発研究所 研究員 よしおひろこ 由雄緩子

キーワード

専門まちの保健室、生活習慣病、フットケア、健康意識

研究概要

【目的】 本研究は専門まちの保健室「看護師による生活習慣病と足の相談」に参加した地域住民の1ヶ月後の健康に対する意識を明らかにし、セルフケア行動支援のための看護介入の示唆を得ることを目的とした。**【研究方法】** 研究者らが定期的に開催している専門まちの保健室「看護師による生活習慣病と足の相談」に参加した地域住民を対象に、この看護相談に参加した1か月後に、①健康について意識したこと、②今後の生活に取り入れたいと考えたこと、③自身の生活に取り入れてみたことの3つの視点についてインタビューを行った。録音したインタビューから逐語録を作成し、健康に対する意識について語っていた内容を抽出し、意味のまとまりごとにまとめた。**【倫理的配慮】** 研究協力者には研究の趣旨、個人情報保護、研究協力は自由意思であることを口頭と文書で説明し同意を得て実施した。なお本研究は、所属施設の研究倫理審査委員会の承認を得て行った。**【結果】** 研究協力者は9名（男性4名、女性5名）で、平均年齢は77.3歳であった。看護相談に参加した1ヶ月後の健康に対する意識は、4つのカテゴリーが見出された。研究協力者は、看護相談でフットケアを受けたことは気持ちがよいという体験から、教わったケアの方法を<自分で試してみようと思う>ことや、自分に必要な足のケアを認識し、身体の状態を確認しながら、<足の手入れをする>という意識が生まれていた。しかし一方で、実際に提案されたケアを試してみたが、手技がうまくできないことや、身体機能の低下により、<継続することは難しい>と感じていた。また、看護相談において、気がかりである身体の状態を確認できたり、看護相談での対話を通して健康と生活との関係に気づいたりすることにより、改めて健康を考える機会となり、<専門家との対話を通して自分にあったケア方法を見つけたい>という意識がみられた。**【考察】** 専門まちの保健室「看護師による生活習慣病と足の相談」に参加した地域住民は、個別的な看護相談で自分の足にあったケアをする気持ちよさを体験し、専門家との対話による相互作用により、より自分に合った方法を見つけ活かしていきたいという意識があったことがわかった。このことから、地域住民のセルフケア行動の支援には、個別的で専門的な対話や、ケアの体験が重要で、それらの支援を継続的に行っていくことが必要であると考えられた。

アピールポイント

地域で生活されている住民は、病院に通うまではいかないが、足のことや生活習慣病のことなど専門家に気軽に相談したいというニーズがあることがわかったため、今後も地域住民のニーズを把握しながら、専門まちの保健室活動を発展していきたい。なお、本研究は平成28年度兵庫県立大学特別研究助成を受けて実施

した。